

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(202 .12)令和 年度:

,

# 精神障害者を支える熟練看護師の看護技術の構造

学生氏名 上山竜刀 藤澤怜央 松田樹  
(指導: 石川千恵)

## 緒言

精神看護では、患者の主観的体験や内的体験などの要素から他領域に比べると対象者との関わりやケアの困難性を強める要素が多い<sup>1)</sup>。実際、私たちが精神看護学実習においてどこまで踏み込んで良いのか迷い、関わり方の難しさや技術の不足などの課題が見つかった。

本研究では精神障害者を継続的に支援している熟練看護師を対象に、対象者との関わり方の場面で用いる看護技術についてインタビューを行い、これを分析することで精神障害者と関わる看護技術の構造を明らかにし、これからの看護に生かしていく。

## 方法

### 1. 研究の種類・デザイン

前向き、質的記述的研究

### 2. 研究対象

精神障害者を継続的に支援している看護経験年数10年以上の看護師合計5例

### 3. 用語の定義

Benner<sup>2)</sup>は熟練者の行う持続的で熟練した観察は、卓越した中核的要素であり、患者や家族に変化が生じたとき、即座に反応できるような発動力を持っているとして述べている。また、熟練看護師は、規則・マニュアル・格率等の分析的な原則には頼らず、直感的に状況を把握・判断し、看護実践を行うと論じている。本研究では、精神障害者を10年以上継続的に支援している看護師を熟練看護師と定義した。

### 4. 研究方法

インタビューガイドを作成し、これに沿って半構造的インタビューを行う。インタビュー終了後、録音データを使用し逐語録にした。

### 5. 分析方法

逐語録に記載された内容を、ベレルソンの内容分析の手法<sup>3)</sup>を参考にして、目的に沿った内容ごとに意味内容の類似性を表す表現を検討しカテゴリーとした。研究メンバーと担当教員で、内容が一致するまで繰り返し検討することで科学的真実性の確保に努めた。

### 6. 倫理的配慮

精神科認定看護師の会会長へ研究の趣旨について文書を用いて説明し、研究対象者の紹介を依頼し、目標対象者数5例まで、スノーボールサンプリング法を用いた。研究対象者へ文書を用いて口頭で同意を得、zoomを用いて半構造化インタビューを行った。これら旭川医科大学倫理委員会の承認(No. 22033)を得て行った。

## 結果

1. 対象者は男性5名であった(表1)。
2. 対象者との関わり方の場面で用いる看護技術について分析した結果、13サブカテゴリー、5カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈 〉で表記する(表2)。

【専門的知識】は、〈専門的知識を活用する〉

〈専門的知識を理解する〉〈他者から専門的知識を学ぶ〉で構成されていた。【実践している技術】は、〈対象者の思いを把握し、ケアの方針を考える〉〈身体を介した精神的ケア〉〈対象者との対話場面での技術と姿勢〉〈精神科の治療的ケア〉〈精神科の治療的ケア〉〈アセスメントと症状への対応〉で構成されていた。【これまでの経験】は、〈成長発達〉〈対象者との関わり〉〈医療者との関わり〉で構成されていた。【自己理解】【看護観】は、熟練看護師によってそれぞれ個別性が強く類似性がなかった。

表1 研究対象者の背景

対象者	性別	精神科 経験年数	所有資格
A	男性	12年	精神看護専門看護師
B	男性	20年	精神看護専門看護師 精神科認定看護師
C	男性	27年	精神科認定看護師
D	男性	32年	精神科認定看護師
E	男性	29年	精神看護専門看護師 精神科認定看護師

表2 精神科熟練看護師の看護技術の構造

カテゴリー	サブカテゴリー	数
看護観	看護観	81
実践している技術	対象者の思いを把握し、ケアの方針を考える	19
	対象者との対話場面での技術と姿勢	16
	精神科の治療的ケア	7
	身体を介した精神的ケア	5
	アセスメントと症状への対応	4
専門的知識	専門的知識を活用する	23
	専門的知識を理解する	6
	他者から専門的知識を学ぶ	5
これまでの経験	対象者との関わり	19
	医療者との関わり	4
自己理解	自己理解	23

## 考察

本研究では、熟練看護師の看護技術は、【看護観】【実践している技術】【専門的知識】【これまでの経験】【自己理解】で構成されていた。【看護観】【自己理解】は、熟練看護師によってそれぞれ個別性が強く類似性がなかった。萩野谷ら<sup>4)</sup>は、看護観について「看護に対して探求心を持つことを基盤に、看護の対象者と対峙し自己の看護を俯瞰することを通して、看護に対する自己洞察から得られる看護専門職業人としての行動の指針となる価値観である」と定義している。つまり、【看護観】【自己理解】は関連しており、【看護観】とは自己の看護の俯瞰や自己洞察などの【自己理解】によって生まれる個人の価値観であるといえる。また、濱田<sup>5)</sup>は、熟練

看護師が用いている技は看護師の基本姿勢によって個別性があるとしており、これらのことから看護技術の構造には個別性があると考えられる。

【看護観】【実践している看護技術】【専門的知識】に関して、氏家<sup>6)</sup>は、看護技術に影響を及ぼす因子について、看護観、看護行為、関連諸科学があると述べている。関連諸科学は我々の研究における専門的知識と同義であると考えられるため、【看護観】【実践している技術】【専門的知識】は関連しているといえる。先述したように、【看護観】【自己理解】にも関連性があり、他カテゴリーも同様であると考えられるため、【看護観】【実践している技術】【専門的知識】【これまでの経験】【自己理解】の5つのカテゴリーは相互に影響しあっているといえる。

今回、精神障害者とかかわる看護技術の構造を明らかにすることを目的としているため、カテゴリー【実践している技術】について更に考察していく。

【実践している看護技術】の〈対象者の思いを把握し、ケアの方針を考える。〉の内容は、「対象者の苦しさを理解する。」「対象者と感情を共有する。」「対象者と共にケアの方針を考える。」などであった。濱田<sup>5)</sup>は熟練看護師の技の基本は、当事者が体験する様々な出来事を、障害の理解や受容ができていないその当事者の立場に身をおいて共有し、出来事に伴う気持ちに添うことと、当事者のニーズに応じた形で援助を行うことである。

【実践している看護技術】の〈対象者との対話場面での技術と姿勢〉の内容は「成功体験を意識化する。」「対象者に合わせて対話内容・方法を定める。」「対象者と対等に接する。」「できるだけ肯定文を使用する。」などであった。野嶋ら<sup>7)</sup>によると、効果的なコミュニケーションのためには、対象はもちろん看護者双方の自尊心が維持できるようにすることと、対象を受容し理解したときをまず伝えることが必要不可欠である。

【実践している看護技術】の〈精神科の治療的ケア〉の内容は「認知行動療法を行う。」「当事者研究を行う。」「アイコンタクトをとる。」などであった。野嶋ら<sup>7)</sup>によると、看護者としては精神療法の技術を用いながら、看護者という一人の専門家として信頼してもらうことが重要になってくる。

【実践している看護技術】の〈身体を介した精神的ケア〉の内容は、「身体的ケアを丁寧に扱う。」「タッチングをする。」などであった。茂野ら<sup>8)</sup>によると、人に触れるという行為は、対象者の状態を理解するための観察の手段であると同時に、タッチングという1つの看護介入行為にもなる。人に触れることは、人を安心させる、リラックスさせるなどの効果をもたらすことができる。また、患者に安心感を与え、対象者との信頼関係構築を促進させる作用もある。

【実践している看護技術】の〈アセスメントと症状への対応〉の内容は「危険を察知した場合、迅速に対処する。」「対象者の外観を観察する。」「精神症状出現時の心理的ケアを行う。」な

どであった。野嶋ら<sup>7)</sup>によると、精神看護はケアの対象者を理解することが最も重要であり、「全人的に理解する」「ケース像の形成」「アセスメント」なども、すべてケア対象を理解しようという試みである。

以上のように、熟練看護師の【実践している技術】は、様々な文献や教科書に記載されていた。つまり、【専門的知識】に裏付けされたものであり、対象者に向けた選択・判断していた。

【看護観】【これまでの経験】【自己理解】これらとも関連していると考えられる。

#### 結論

精神障害者を支える熟練看護師の看護技術は【看護観】【実践している技術】【専門的知識】【これまでの経験】【自己理解】から構成され、これらは相互に影響しあう。また、看護師によって個別性がある。

#### おわりに

本研究の意義は、精神障害者を支える熟練看護師の看護技術をこれからの看護に生かしていくこととしていた。熟練看護師の多くの語りの中で、看護に対する情熱や向上心、意欲の高さを感じた。熟練看護師の実践している技術は私たちが今すぐに獲得できるものではない。そのため、私たちは今後、看護を実践していく中で自分自身や自己の看護観、自身が実践している看護を見つめなおしていく必要がある。また、その中で継続的に知識の蓄積を進めていくことで、熟練看護師の実践していた看護に近づけていきたい。

#### 謝辞

本研究にあたり、ご協力を下さいました看護師の皆様へ深く感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 吾郷ゆかり (2001): 精神看護実習における言語コミュニケーションの困難性—対話場面の交流分析より—、島根県立看護短期大学紀要 6、125-132.
- 2) P. Benner (2005): ベナー看護ケアの臨床知、医学書院.
- 3) 舟島なをみ (2007): 質的研究への挑戦第2版、医学書院、40-79.
- 4) 萩野谷浩美、日高紀久江、森千鶴 (2019): 「看護観」についての概念分析、看護教育研究学会誌 11 (1).
- 5) 濱田淳子 (2007): 地域で暮らす精神障害者に対して用いられる熟練看護師の技、日本精神保健看護学会誌 16 (1)、40-48.
- 6) 氏家幸子 (1990): 看護技術の構造と研究方法の思索、日本看護科学会誌 10 (1)、1-7.
- 7) 野嶋佐由美、神郡博、永井優子、他 (2011): 実践看護技術学習支援テキスト 精神看護学、第8版、日本看護協会出版会.
- 8) 茂野香おる他 (2019): 系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護技術 I、第17版、医学書院.